

[制作記録]

技工と表現について

About the Technique and Expression

原 智
HARA Satoshi

本制作記録では象嵌、素材、金工技法を記して金属工芸に於ける表現の可能性を述べる。

象嵌技法は文字通りかたちを嵌める技法である。端的に述べると硬い素材に柔らかい素材を嵌める事を指す技法と言える。金属の特性はその素材それぞれに於いて異なる。延展性、硬度、素材色、酸化色、硫化色等すべてが特性によって表情を変える。象嵌はそれらの特性を生かして表現へと昇華させながら金属をコントロールする技術であり、物質である金属を美的表現へと導く技法である。

鉄は我が国に紀元前三世紀ころ青銅とほぼ同時期に日本に伝来した。鉄は地殻に5パーセント含まれているが、伝来当初は自国で生産する能力は無く、弥生時代（紀元一世紀から三世紀）になって自国で製鉄が行われるまで製鉄された材料のみが使用されていた。砂鉄を材料とする「たたら製鉄」が自国で確立するのはそれよりも更に時を経てとなる。「たたら製鉄」で作られた鋼は、その優れた特性から武器や鉄器が多く生産され周知の通り日本刀の原料として活用された。

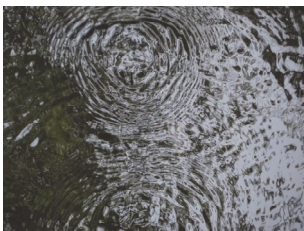
本研究作品で使用した主素材である鉄は炭素量が0.3パーセント以下の比較的柔らかい鋼材である。近年の研究では鉄胎に象嵌する技法の確立と酸化に

よる発色を独自の表現における特色として生かす事が中心となっている。象嵌した後に薬品によって強制的に錆を発生させ、タンニンによる黒化、その後漆焼き付けによって表面を安定させて仕上げる技法を行った。歴史的にみると中世後期から江戸時代に作られた武具にこの仕上げ技法がみられる。

象嵌される金、銀、銅は純度100パーセントに近く延展性に優れた素材を主に使用している。嵌められた金属は胎に彫られた溝の中で広がり、その張力を利用して固定する。そのため基本的に胎よりも柔らかい素材を使用する必然性があり、純度が高ければ高いほど作業性は良い。象嵌には平象嵌、布目象嵌、流し込み象嵌などがあげられる。江戸初期に加賀国で発達した加賀象嵌は平象嵌の派生であり当時刀剣や鐙、鎧つば よろいの装具等に用いられた。

特色として種類の異なる金属を階層に分けて順番に嵌めて行き。色金（金、銀、銅、四分一、烏銅）の金属固有の発色を最大限に生かす技法である。また表面的に地金を嵌める布目象嵌とは異なり、母材となる胎に深く色金を埋めることで堅牢に文様が食い込み武器としての強度を持つ。よろい鎧象嵌と呼ばれる所以である。

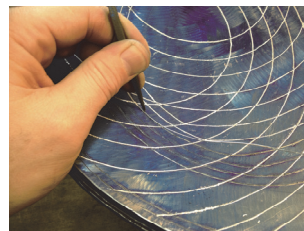
作品制作に際し、重要視していることは刻まれる



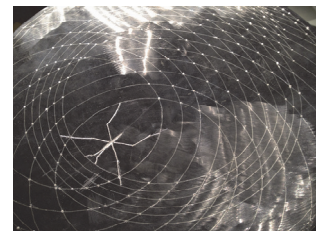
意匠題材



毛描き



嵌め込み



象嵌後研磨

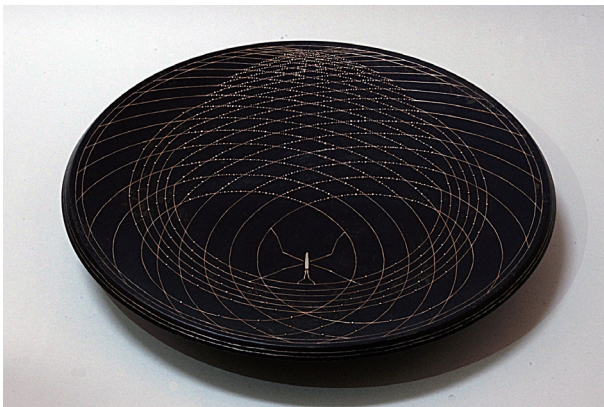
文様や加飾される意匠の背景と考察である。日常目にする風景や気象現象、昆虫や植物の持つ美をいかに自身の心眼を通して観取し具現化するかにある。かの陶芸家「富本健吉」が生涯の信念として残した「文様から文様を作らず」の言葉は絶えず同様に意識することであり座右の銘でもある。

作品制作にあたり考案した象嵌技法について述べる。金属加飾技法としてある「魚々子打ち技法」は平面上に円状の打痕を並べて魚の卵のように見せる鑿技法の視覚効果を応用し新たに魚々子象嵌技法を考案した。表面に極微細な半球状の象嵌を施し魚々子状に配置することで、鑑賞者の視点の移動によって煌びやかな表情を変える技法となり、絵画にある点描的表現を金属で行う事が可能となった。この表現技法は多くの可能性を持っていると考える。点の

大きさと配置、地金の種類、半球凸面の高低によってより多彩な加飾へと発展することが出来る。今後とも継続して研究を重ねる。

次の段階では線象嵌と魚々子象嵌の併用、更には重ね象嵌も取り入れ、より複雑な表現を試みた。点、線、面で有機的交差をさせる事であらたな加飾表現への展望となった。

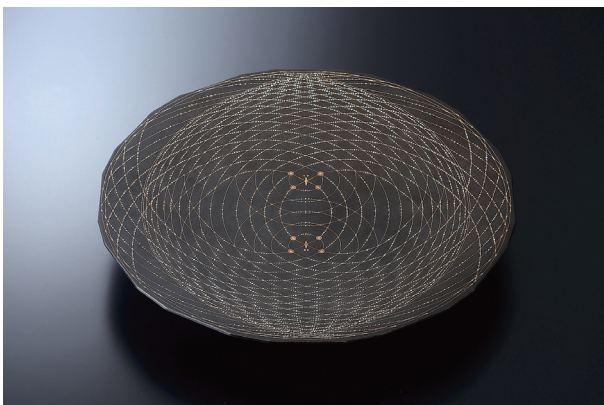
(はら・さとし 工芸/金工)



鐵地魚々子象嵌皿「水紋」



鐵地魚々子象嵌皿「朝露」



鐵地魚々子象嵌皿「水紋」



鐵地魚々子象嵌花器「雨」



魚々子象嵌箱



鐵地魚々子象嵌置物「WORLD」



魚々子象嵌花器「黄昏」



魚々子象嵌器



魚々子象嵌香炉「雨」

